



# 女神

---

むかしむかし、天竺のある国で

ふね友み

---

朝日も未だ顔を見せきらぬうち、パードゥパクシニは湿った木々に挟まれた細道を歩いていた。しっとりとした川の気が満ちている。空気は薄暗く、冷たい。それでも、大体が見えれば洗濯には事足りる、とパードゥパクシニは思っている。鶏が鳴く。そろそろ村人たちも起き出しているだろう。どこかで犬が吠えている。

どうせ、この川辺に来る手合いは少ない。わざわざここを訪れる村人はなし、師や姉妹たちぐらいだ。それでも、できるだけ一人きりで、朝の川を、静かに、味わいたかった。鳥が鳴いている。ほのかにべたつく水の気が頬を撫ぜる。木々の匂いが漂う。湿った土の暗みから、ひんやりと夜の名残が立ち上る。じきに日は全身を空に乗り上げ、泥も生温かくなるだろう。もっともこの辺りはこの川の恩恵を受け、常にほどよい涼風が走っている。

進むうち、踏みしめる足に触れる砂利が増えてきた。

パードゥパクシニは常通り、川の水に右の手先で触れ、己が額に触れてから胸にその手を当て、真言を唱えて敬意を表してから、しゃがみこんで持参の布類を浸した。

まだ暁のこの時間、世界は美しい。

人の手がこうして川を多少騒がせたところで、むしろこちらの方が周囲に溶けてしまいそうな気さえする。そのあやふやさがよい。有とも無ともつかぬ世界で、ずっと美しいまま、雑念の入る余地もなく神の血肉へと融けてしまえばよいのだ。

そのように感傷と瞑想の間を彷徨いながら手を動かしていたので、異物に気づくのが遅れたのだろう。

常にはない暗い塊を視界が捉えた時、思わず肩が跳び上がった。一際大きく、水が跳ねた。

それは、一見して死体だった。這うように乱れた長い髪は薄汚れた衣と一体と化し、昇り来る朝日を向こうに、黒ずんで禍々しい。打ち上げられたのだろう、そうした物独特の、砂のこびりついた感じは影からも窺えた。

川の清めを受けているとしても、このように近くで平気で洗濯をしていたのだと思うと怖気がした。一度帰ってから、改めてお清めをしなければ。

いくらか経てば、パードゥパクシニはすっかり冷静に考えていた。この場に死体を放置しておくのも如何なものだが、自ら触れるのも厭わしいし、何より相応しくない。適当な者呼んで運んでもらうのがよいが、それでは他の者が使うのに間に合わない……いや、どちらにしろ、このような穢れがあつては、誰も今日は使いたがらないだろう。使える川場は他にもある。やはり穢れの者呼んで片付けさせよう。

そこまで考えたところで、死体が身じろぎした。

見違えたかと目を凝らしたら、影の中からきらり、射抜くように光った目と、目が合った。

パードゥパクシニは身震いした。死体では無かった。しかし恐ろしかった。生きているから尚更、恐ろしかった。もしも手を伸ばされ、縫られたらどうしようと身構えた。

その人は黒かった。陰になっているためではあっても、光ったその目も、肌も、髪も、全てが黒いようだった。夜は明けようとしているのに、突然に夜の底を見せ付けられているようだった

。

黒い人は動かない。ただ目だけが日を反射して光っている。

パンドゥパクシニは動けなかった。生きての方が問題だった。手を差し伸べるのは躊躇われるが、捨て置くのも気が咎める。

……成人として認められ、師の家を出る前であったなら、気高いパンドゥパクシニは迷いなく手を差し伸べただろう。神の子たる己がそうそう穢れることなど無いと、疑いもしなかった。

しかし今、倒れている人の濁りなき黒さは、見ているだけで <sup>パンドゥパクシニ</sup> 白き翼 の玉の肌を侵食し、穢していきような気がした。

動けなかった。

しかしふいに、黒い人がやけにゆっくりと瞬きをした。まるで物を見るようにこちらを見た。

縋る気などはなから、毛頭無いのだった。

それに気づいた時、パンドゥパクシニのうちに、何か負けん気のような感情が生じた。

どのみち、目が合ってしまったからには、穢れは移されている。

いつのまにか冷え切った身体に、火花のように落ちた衝動に突き動かされ、パンドゥパクシニはその人に向けて一歩、踏み出した。あとは速かった。

黒い人は、意外や、傷という程の傷は負っていなかった。打ち身はいくらかあるようだったが、それも担ぐ時の呻きから察した程度で、見た目には分からなかった。大きな流血が無いことはありがたい限りである。ただ、ひどく疲労…あるいは、衰弱、しているのには違いなく、家に運んで程なく、発熱し、息も荒くなった。

黒い人は娘だった。十六、七、いやもう少しいっているだろうか。痩せぎすの身体では分かりにくい。土台、パンドゥパクシニはあまり女と関わりが無いから、大した勘があるとも言えない。しかし、痩せてくれていたおかげで運ぶのにはさほど苦労しなかった。

ボロボロの簡素な服は簡単に脱がせられた。パンドゥパクシニは女ではないが、かといって男でもないから、躊躇いなくガビガビの身体を拭いてやる。骨ばっている上、肌も弱っているようで、ひどく頼りない感触がした。

脱がした服は、あちこち破け、泥だらけになってはいたが、この辺りではあまり見ない素材のように思われた……濡れそぼっているから確信は持てないながら、元はかなり滑らかな、良い布地であるのかもしれない。木の皮と見紛ってしまいそうな色や、単純なつくりからは意外であり、何か深い意味や事情がありそうにも思えたが、ひとまずは深く考えない。

適当に布を巻いておいて寝かせると、養生薬になる木の根を取りに出かける。ついでに、この朝も早くから椰子に登る男がいたので、銭を渡して実を貰った。井戸に寄った方が良いかとも思ったが、後で出直せば良いと考え直す。水は重く、見かけによらず腕っ節のあるパンドゥパクシニであっても、椰子の実と一緒に持つのは骨だ。普通なら昼まで保つ量だから、朝に必要な分ぐらいは蓄えがあるはずである。

さて、と、台所で薬根を煮出しながら思い巡らす。黒い娘はまだ夢の中だ。起きない内は、機械的に面倒を見ていればよい。しかし、再びあの目が開いてこちらを見ることを思うとやはりぞ

っとしない。声など考えたくもない。帰る場所があるようなら、さっさと帰れと言うまでだが、そうでない時のことを考えると気が滅入った。連れ帰ったのは軽率だったかもしれない。師に相談すべきだろうが、この娘の黒さを見れば咎められ、叱られるような気がして、気が重い。

黒は不浄の印だ。確かに、肌色の暗い者などいくらでもいるし、建前はともかく、色は生まれつきのものだ。パーンドゥパクシニほど明るい肌色はむしろ珍しく、だからこそ寺院でも施しを多く受けられていた。それでもこれほど暗い肌の人間は見たことがなく、今そこで寝ているのを見ても、不吉な感じがひたひたと心に這って来る。

しかし起きてくれなければ困るのだ。ふらふらと出歩かれては困るから、放って出る訳にはいかない。文字など知らぬから、書置きもできない。

それでいて、起きて目を、言葉を交わすことを恐れている。

溜め息を吐きながら、今度は椰子の実を削る。まったく厄介ごとを持ち帰ってしまった。

結局、昼を回り太陽が中天から降り出しても、娘は起きなかったので、パーンドゥパクシニは昼からでも仕事に出ることを断然せざるをえなかった。姉妹たちや師には申し訳ないが、致し方ない。家から遠すぎない範囲で、庭や畑をいじって日を過ごす。妙に時が経つのが遅く、虫の音や鳥の声、太陽の囁きがやけに大きく聞こえたものだ。

しばらくすると、師が来た。仕事の帰りだろう。パーンドゥパクシニがひざまづく礼をとると、師は慣習通りそれを止める。

「風邪でもひいたのかと心配だね」

パーンドゥパクシニは肩を竦めた。

「いいえ。心配おかけして、申し訳ありません……行き倒れがありまして、捨て置くのも気が咎めるので、看病しておりました」

「ほう。どのような者だい」

「それが……」

言いよどむ。どことなく後ろめたくて、その先を紡げない。

何事も、因果応報の<sup>ことわり</sup>理の中に在る。銘々に相応しい生を享け、生き方に見合った最期を遂げる。その邪魔をするようであれば、助けることは、必ずしも良いこととは限らない。

何より、見知らぬ者からは穢れを移されることもある。身元の知れないものに、不用意に関わるべきではなかった。

昔、パーンドゥパクシニは反発したものだ。神の<sup>まなご</sup>愛子である自分たちこそ、誰にも公平に、神の恩寵を分け与えるべきだし、そうできるのは半陰陽である自分たちだけなのだから。

しかし今にして思えば、それは己に、けして穢れぬ清らかな光があると信じていたからこそ言えたことだった。その根拠を失った今、世俗の者と同じに穢れが恐ろしい。

答えあぐねていると、師は違う質問をしてきた。

「様子はどうなんだい」

「……熱を出して寝ていますが、そう悪くはないと思います。ただ、ひどく痩せていて、あまり

食べていなかったのかもかもしれません」

師の腫れぼったい臉が少し上がった。

「ふむ。そうかい。何か必要な薬があれば来なさい。よく務めを果たすのだよ」

神の恵みを人にもたらずという務めである。

「はい。よく務めます」

師は去っていく。

姉妹たちの許には、村の男が通うこともある。パーンドゥパクシニたちの行動はさほど制限されている訳ではない。しかし分を超えた不浄を持ち込めばあっけなく切り捨てられ、打ち捨てられるだろう。

もっとも、師はきっとパーンドゥパクシニを見捨てないし、見捨てられない。

パーンドゥパクシニはそう確信していたし、その点では師に絶対の信頼を置いていた。

師には、パーンドゥパクシニを見限ることができない負い目がある。

黒い娘が目を覚ましたのは夜になってからだった。

パンドゥパクシニも既に横になっていたが、闇の中、身じろぎの気配に目を開けた。

呼吸から、起きたな、と判断して、そっと声をかける。

「……気分はいかがですか」

びくりと震えた。

娘は跳ね起きて、

「誰そ」

と声を上げた。

躊躇いのない誰何は、パンドゥパクシニが今まで聞いたどの女の声とも調子が違った。主が使用人に物を言いつけるようでありながら、一方では子どもさながらの無邪気さがあった。

どこか、芝居に出てくる王女を思い出させた。

そういえば、身に纏っていた衣の、生地は妙に良いものようだった。やんごとなき生まれであるなら、パンドゥパクシニの選択は当初ほど後ろめたいものではなくなる。少しの期待と安堵と共に、そんな己の思考への落胆を覚えながら、黒い娘に答えた。

「パンドゥパクシニと申します。陽にも陰にもなりえる者、天にも地にも縛られぬ者。

マハーデーヴィーダーシ  
大女神さまが僕にございます」

「神子か」

幾分か力の抜けた響きを捉える。

暗い中でも輪郭ははっきりと見えるようになってきていて、娘が再び横になったのが見えた。

「お身体はまだ痛みますか」

「あちこち、ひどくきしむように痛い。おぬし、<sup>わらわ</sup>妾を助けたのか」

「川辺に打ち揚げられておられましたので」

「慈悲深き巡り合わせよ。大水などは珍しくもないが、流されたということは、居眠りでもしてしまったのかもしれぬ」

「祈りの行でも、してらっしゃいましたか」

「似たようなものじゃ」

今一要領をえないが、追究はしなかった。代わりに訊ねた。

「お名前を伺ってもよろしゅうございますか」

「ヒラニャカーラーという」

ヒラニャ・カーラー

パンドゥ・パクシニ

黄金の黒とは、大層な名前である。白き翼持つ者である自分も、人のことは言えないが。

「ヒラニャカーラー様。もう夜も遅うございますから、お話は明日に伺いましょう。今日のところはお休みください。私は朝から務めに出てまいりますが、どうか私が戻るまで、この寝屋でお休みくださいますよう」

ようは、勝手に外に出るなと言っている。

しかしヒラニヤカーラーは気分を害したふうもなく答えた。

「あいわかった」

全身の痛みの方に気をとられていたのかもしれない。そうして深い息を吸った。

パードゥパクシニはもう一度念を押すべきかしばし迷ったが、やがて考えることをやめ、自らも寝に入った。

外では蛙がうるさく鳴いている。よくある、べたつく夜である。

翌朝、パードゥパクシニが洗濯に行って帰ってきても、ヒラニヤカーラーはつとも目覚めなかった。額に触れてみたところ、熱は下がっていない。身体がまだまだ、休養を必要としているのだろう。それでも穏やかな様子で寝ているので、さして心配は無さそうだった。

水瓶は分かる所にあるが、念のため、枕元に器一杯分、置いておく。

パードゥパクシニは家を出て、寺に向かった。朝のこの時間、空はまだ少し藍の名残を残しながらも花で染めたような淡紅に色づき、日陰は川よりの風でいくらか肌寒い。それでも寺院に着く頃には汗を掻いているので、涼しいと感じられるうちは幸いである。濃い陰をつくる木々は、ここではよく愛される。

普段の仕事場である寺院は高台の上にあり、参道は長く、歩いて二十分とかかる距離からでもその塔の天に向かう頂は見る事ができた。この辺りでは随一の大ききで、遠方からお参りに来る者も多い。屋根は明るい赤土色だが、この時間ではまだ暗くて色は見えない。

参道を歩いていると、やがて経文を唱える人々の声が高く低く、腕の悪い職人による鐘のような振動を以って聞こえてくる。参道の脇にはあちこちにお堂があり、村人たちは朝一番にそこで僧侶の高説を聞き読経をしてから寺院に参拝をし、そうしてから初めて食事をし、仕事を始める。

砂利の参道を渡り終え、鳥居を目前にすると、丁度<sup>アームラ</sup>マンゴー色の光が寺院を東から照らしていた。パードゥパクシニは目を細めた。すぐに暑くなるだろう。

姉妹たちの定位置は本殿手前の階段を降りてすぐの所だった。

パードゥパクシニが近づいていくと、既に先客がいる。身体つきはがっしりとしているが、髪を長く垂らし、紫と若草の色鮮やかなサリーを着ている。

姉妹の一人、<sup>バララクシュミー</sup>小吉祥 である。

パードゥパクシニよりも早く来ているとしたら、彼女しかいなかった。おかげでパードゥパクシニは毎朝、ここまでの道のりがいささか憂鬱なのだった。

「おはよう。いつもより遅いのね」

バララクシュミーの声は、元々低い響きが不自然に上ずっている。これがパードゥパクシニはあまり好きではなかった。姉妹たちには、こうした声を好んで使う一派があった。

「おはよう。そうだろうか」

「迷い人を看護していると聞いたわ」

「ああ。熱があるが、だいぶ落ち着いてきた」

「まあ。変な病気持ちじゃあないでしょうね」

「さあ。しかし、やんごとない出自のように見える」

「あらまあ、本当かねえ。たちの悪い、盗人じゃなければいいけどねえ」

どこか馬鹿にしたような、棘を含んだ声だった。

バララクシュミーは、必要以上に抑揚をつけた口調もそうだが、言うことの全てが、頭の弱い娘のようにパーンドゥパクシニには思えた。別にそれしき、眉を顰めはしても大して気にはしないが、どういうわけかこの姉妹は、やたらとパーンドゥパクシニに突っかかってくるのだった。

パーンドゥパクシニは無言で背を向け、本殿正面に向かう。

僧侶が何事か中でやっているが、これには構わない。参拝客が来る前に準備があるのはお互い様である。

まずは手を合わせ目蓋を閉じ、日と神とに賛辞を捧げ、祈る。今日は少しだけ、黒い客人の快復も祈ってやる。

そうして手を合わせたまま、本殿の周りを一周。再び正面に戻ってくると、聖句を唱えて下がった。

目蓋を上げると、世界はまた生まれ変わったようだった。長い黙祷から目を開ける瞬間が、パーンドゥパクシニは好きである。

バララクシュミーの相手をするのは相変わらず億劫だったが、敢えて毅然として傍らに座して、経を歌い出した。

僧侶たちなら歌いはせず、唱えるが、半陰陽は歌う。

服装にしても、僧侶は簡素な木皮の衣を、半陰陽は色彩豊かなサリーを着る。パーンドゥパクシニは大体、桃色を纏う。

それゆえに蔑まれることもある。

しかし、それゆえに愛されもする。

低く朝の捧げものの歌を空気に乗せていると、やはり低く、バララクシュミーが同調し出した。二つの声が一つの経を奏でる。

美しい。この瞬間、世界はまさに一であり多である。

……バララクシュミーは歌いつつ、細眼にパーンドゥパクシニを見た。

パーンドゥパクシニは目を閉じている。しかし背筋は大地から光の柱でも生えているが如くに神々しく伸び、後光のように朝日を受け、強い明暗はパーンドゥパクシニを聖者の彫像のようにも見せる。

蓮池に浮かぶような、凜とした美しさがあった。

その姿は、かつてバララクシュミーが憧れたパーンドゥパクシニの佇まいにとても近い。女神その人に一番近いところにいるようにも思えた姉妹を思い、複雑な気持ちになる。

朝の独特な静寂の中、時折届く鳥や牛の声と共に歌う。

バララクシュミーはしばらく目を開けてパーンドゥパクシニを見ていたが、やがて自らも目蓋を下ろし、音の響くに任せた。



やがて抜けるような青空が天を覆う。

参拝者の行き交う時刻、パードゥパクシニはほとんどずっと、歌うか舞っている。

適材適所というやつで、他の誰がするよりも、人も寄ってくるし、喜捨も増えるのだ。

姉妹たちからは、よくもそれだけ動き続けていられると言われることもあるが、元々激しい舞ではないし、それこそ物心ついた頃から続けていることだから、パードゥパクシニ自身には特別なことという意識はない。

他の姉妹たちは交代で舞に入り、後の時間は参拝者に話しかけたり、あるいは相談に応じていたりする。殊に母親や若い娘は、相談に来ることが多い。

稼ぎは均等に分配される。

不満が、全く頭を掠めないわけではない。

しかしパードゥパクシニは、人々から相談相手には選ばれない。時折寄ってくるにしても、好色めいた男や、好奇心の強い幼い子どもたちばかりだ。

抜きんでた容姿とふさわしい佇まいとで、祝福を授ける者としては一番人気だが、身近な存在とはなりえないようだった。赤子への祝福を行う時も、儀式的中心にはパードゥパクシニが、謝礼の交渉や世間話の中心には師や、時によっては別の姉妹がいる。

寂しさは感じるものの、気楽でもあり、結果的にはうまく調和をとって機能しているといえる。

寂しさというよりは、劣等感かもしれなかった。

しかしパードゥパクシニたちの本分は神子である。姉妹たちはそれを忘れ人ばかり見ていると、嫌悪感を催すこともある。パードゥパクシニにとっては神との交わりが至高であり、使命であり、誇りである。姉妹たちにはそうではないようだが、その分人々の信頼はそれなりに厚い。

そうした屈託に心を浸さないためにも、歌い舞い続けることは丁度よかった。

ウィーナ ムルダーンガム

琵琶や二面太鼓の響きと喧噪の中に、神の在処と世の真理を探りながら身を任せていけばよいのだ。

近場で子どもが産まれたのでもあれば、午後も仕事があるが、そうでなければ朝のうちに解散するので、この日は師を家に招いた。

改めてヒラニヤカーラーなる客人を紹介するためだ。起きていればもう話もできるだろうし、目通しをしても問題ないだろうと判断したのである。

また、快癒のまじないを授けてやってもらおうとも思った。パードゥパクシニも既に施してはおいたが、師の方が功德を積んだ身だから、重ねて施してもらっても悪いことはないだろう。

何より、黒い娘があまり素性の怪しいものではなさそうだと感じたことで、懸念が減ったことが大きい。

どうせ会わせるならば早い方が良いということもある。

家に戻ると、ヒラニャカーラーは目を覚ましていた。

仰向けのまま休んでいたようで、二人が簾をどけて入ると上半身を起こした。

「無理はなさらず。お加減は如何ですか」

「よい」

短く答えて、ヒラニャカーラーは少しだけ首を傾げて師を見た。

「我が師たるラクシュミーにございます。師よ、こちらがお話したヒラニャカーラー様です」

すると師は進み出て、ヒラニャカーラーに許しを乞うように首<sup>こうべ</sup>を垂れ、手を土に額にそれから胸にと当てた。

「ラクシュミーにござります。姫様におかれましては、ご機嫌麗しう」

「よい。楽にせよ」

面識があったのかと、一瞬、ぎょっとしたが、すぐに思い至った。

師はかつてさる王宮に仕えていた。所作や話し方から身分を推し量れるぐらいには、知識と経験があるのだった。

あまり自覚して考えていたわけではなかったが、パンドゥパクシニが師を頼ろうと積極的に思った一つの要因として、ヒラニャカーラーの様子に、師ならば的確な判断と対応ができるかもしれないと、どこかで期待したのかもしれない。

師はしばしヒラニャカーラーの言葉を待っているようだったが、ただ無言の、どこかぼうとした視線が向けられるばかりだったから、やがて口を開いた。

「失礼ながら、姫様はやんごとなきお家柄のお方にあられると存じます。いずれのお生まれにございましょうか」

「よい」

師ばかりでなくパンドゥパクシニも次の言葉を期待したが、残念ながら何も続かなかった。

「恐れながら、ご真意図りかねます」

訊ねる師を観察しつつ、ふいにパンドゥパクシニは自分もひざまづくべきかと思い至った。しかし今更どのようにしてよいか分からず、こんな時の作法はそれこそ学んでいないし、ただ目だけを伏せて、手持ち無沙汰に立ち尽くした。

「妾はお宮にあって疎まれ、隠されてきた者じゃ。河の女神にこうして流されてきたのも天命であろう。出自を公にしては何ぞ災いの種ともならん。よって、訊いてくれるな」

「はは、さように」

師は直ちに受け入れたが、パンドゥパクシニは奇妙なものを感じて、目を伏せつつもヒラニャカーラーに注目せずにはいられなかった。

この黒い姫君は、実に立派なことを言われるが、その割には、それにそぐうだけの品格――内から滲み出る強い意志や覚悟といったものが、感じられないように思われた。

また間があった。

「姫君、只今はお暇をいただきますが、どうぞ、何ぞ入り用ございましたら、いつでも私をお召しなさいますよう」

「あいわかった」

「一刻も早いご回復をお祈りしております」

「うん」

「パードゥパクシニ、来なさい」

「はい」

本当は、共に食事をとっていたのだが、口を挟める流れではなく、師に従う。

師はパードゥパクシニを伴って辞去すると、家から二十歩は離れた所まで供をさせ、ようやく止まると囁き声で言った。

「あまりよくないものを感じる」

パードゥパクシニは片眉上げた。

「病さえ癒えれば、早急にお引き取りいただくよう、計らうがよいだろうね」

「……師には、彼女の出自が推察できておいでですか」

「いや。やんごとないご身分には間違いないだろうが」

「では何故。そうであるなら、丁重にもてなすべきでは」

「丁重にもてなした上で、お帰りいただければよいのだ。予感というものだよ。本来は、私の家でお身柄預かりたいところだが、今更そうするのも失礼にとられるかもしれぬし……うちでは少々、狭く騒がしすぎるね」

師の家には今も住み込みで修行し、家事をする姉妹たちが何人もいる。

「どちらにしろ、あの方の容貌は、移動していただくにしても悪目立ちしてしまいます。まだお身体も弱くしていらっしゃいますし」

この辺りに、あれほどに暗い肌色の人間はいない。

師はヒラニャカーラーに対して、パードゥパクシニに何でも申しつけるようにとは言わなかった。しかし実際問題として、今はパードゥパクシニが彼女の世話を焼くのが自然である。

パードゥパクシニは微笑んだ。

「私にふさわしいお客様であると思いたしましょう。心を尽くしてお世話いたします」

師は眉根を寄せる。

「ふさわしいとは、思えないのだよ。あの禍々しいほどに暗い肌色にしてもそうだが、とにかく、何かよくないものを感じる……」

ここで、またパードゥパクシニの悪い癖が顔を出した。

いけないと言われると、できるに決まっていると反発したくなる。

生来の負けん気の強さだろうか。挑戦されているように感じ、受けて立たんと牙を剥く自分が抑えられなくなる。

「私では、役不足だと思いませんか」

突然に尖った口調に、師の眉が跳ね上がった。

「仮にあの方に穢れがあるとして、私がそれに容易く喰われ染められてしまうほど、弱き心身の持ち主だと。神の加護薄い者だと。そのようにお思いませんか」

しかし返す師の口調も厳しかった。

「何の話をしているんだ。誰が穢れの話をした。それは私ではなく、おまえが考えていることだ

ろう、パーンドゥパクシニ。己の不安を糧に他を貶めるな」

かっとう頭に血が上った。

しかし凶星を指され、何も言い返せない。

屈辱に顔を歪める。

「パーンドゥパクシニ。強すぎる自我は、どんな壁よりも高い障壁だよ」

……ラクシュミーは帰路で一人、深い溜息を吐いた。反動で鼻から胸へと広がる土と椰子と草との匂いを味わいつつ、たった今別れた弟子に思いを馳せる。

元々、難しい赤子ではあった。幼い時は大層な癩癩持ちであったし、まるで炎の獅子を内に飼っているようで、己にも掴みきれない感情を、常に持て余しているところがあった。よく、理由も分からず泣きだして暴れ出し、ラクシュミーを途方に暮れさせたものだった。

出自と育ち方との乖離を鑑みれば、仕方がないとも思われた。

しかしそれもやがて成長と共に落ち着き、激しさは自尊心から来る自制心へ、収まりきらない感情の渦は周囲への鋭い注意力と推察力、聡明さへと変化していった。それもまた血筋を思わせた。子供とは概して愛らしいものではあるが、整った面立ちと均整のとれた体格に加え、神子としての強い自覚と誇り高さを備えたパーンドゥパクシニは、誰もが美しく気高いと讃えざるを得ない子供であり、若者であった。

しかしその栄光が陰ったのは、疑うべくもなく、三年前のことだ。

期を満たしたと判断して成人させ、ラクシュミー以外には秘められてきたパーンドゥパクシニの出自を初めて語った。

衝撃は受けるだろうし、葛藤もするだろうとは予想していた。

しかしこれほどまでに尾を引くのであれば、ラクシュミーの判断は誤りであったのかもしれない。周囲が見ていたよりもずっと、パーンドゥパクシニの心は儂く繊細で、幼いままであったのかもしれない。

表面上は変わりなく平静を保ちながらも、以前の輝きはどこか影を潜め、時折ひどく脆い不安定さを見せるようになった。そうして既に三年である。

その胸の内には、師であるラクシュミーへの不信も芽生えているようだ。無理からぬことではあるが、その事実――敬うべき師を信頼しきれないこと――もまた、潔癖なパーンドゥパクシニを自ら追いつめる一因となっているようである。

時にラクシュミーもまた、ひどく自信が無くなる。パーンドゥパクシニを思い悩ませている、過去に己がした決断が、果たして正しかったのかどうか。

貴き一人の子の運命を決定してしまったことが、ラクシュミーの業<sup>カルマ</sup>であることには間違いがないだろう。

しかし、己の分<sup>ダルマ</sup>としては全く、正しいことをしたと自負している。

パーンドゥパクシニの母の遺言のこともあったが、それだけではない。

なぜなら、ラクシュミーは確かにあの時、女神に道を示されたのだから。

女神はパーンドゥパクシニの母とラクシュミーの前に御姿を示し、無言のうちに告げたのだ。

その子を女神の子として育てるように、と。

夜半、ヒラニヤカーラーは急に苦しみ出し、荒い息と寝返りを打つ物音とに、パーンドゥパクシニは目を覚ました。

「ヒラニヤカーラー様」

ヒラニヤカーラーも起き上がっていた。

何とか息を整えようとしているようだったが、ひゅうと音のする息が震えるのや、その直後に荒々しく吐き出される熱っぽい吐息は、暗闇でもごまかしようが無かった。

パーンドゥパクシニは背を撫でてやろうと立ち上がったが、ヒラニヤカーラーは差し出されかけた手を鋭く払った。

「触れるな、離れる」

鬼気迫った言葉は尋常の色合いでなく、パーンドゥパクシニは怒りよりも先に当惑を覚えた。

どう声をかけるべきか、分からない。

ただ、闇に慣れた目は自らを抱え込むように苦しむ娘を捉える。

「ヒラニヤカーラー様」

もう一度声をかけた。

苦しみに息を荒げながらも、ヒラニヤカーラーはこちらを見ない。

しかし唐突に口を開いた。

「河は」

「はい」

「河はどこじゃ」

パーンドゥパクシニは呆気にとられる。

河がどうした。

戸惑っている間にも、ヒラニヤカーラーは立ち上がり出す。

「ヒラニヤカーラー様、夜も遅うございます。今晚は月が満ちているとはいえ、夜闇の中、外を歩くのは危のうございます」

「河はどこじゃ」

虚ろながらも切迫した口調で繰り返し、ふらふらと外へと歩き出そうとする。

パーンドゥパクシニは咄嗟に踏み出して娘の腕を掴んだ。

そこで劇的な何かが起きた。

触れた指先から電流のように、得体の知れぬものが身体中を巡った。

反射的な恐れからパーンドゥパクシニは手を離れたが、今度はヒラニヤカーラーの方が素早かった。

奪い取るようにパーンドゥパクシニの腕をひつつかみ、反対側の手で頭を鷲掴みにされる。

そしてぶつかるように唇に押しつけられた妙に熱く柔らかく湿ったものが何なのか、パーンドゥパクシニはしばらく分からなかった。

混乱の中、しかし直に注ぎ込まれた息吹が鼻梁に達するやそれが唇だと悟り、一瞬他の諸々の

困惑や恐怖が吹っ飛び、激しい怒りが込み上げてきた。

汚らわしい！

しかしすぐにまた恐怖に呑み込まれた。

先ほどはただ通り抜けていただけだった未知のちからの塊が、今度は瞬く間に蓄積されて身体の隅々にまで浸透し、パーンドゥパクシニを呑み込んで尚事足りず、空間全体を浸食し出していた。

これは、見た目の行為から連想されるような、矮小な、肉体的な、生々しいものではなかった。

己の存在が覚つかなくなることに粟立つ。ただただ恐怖が支配する。

だがふと自分の輪郭が今にも断ち切れそうなほど細くなった、消えるか消えないかのあわいに立った時、すいと己というものが肉体から開放されたような感覚があり、その瞬間、パーンドゥパクシニは身体中から立ち昇る光、光、光を見た。

その光の飽和して一つの宇宙を形作り始めた天井に、覗き見る火神や水神、<sup>アグニ</sup> <sup>ヴァルナ</sup> <sup>サヴィトリ</sup> 光輪神を見た。

<sup>シャクティ</sup> 滾るちからに血は沸騰し、足下から怖気が奔流となって逆流し手や髪<sup>ブラフマン</sup>の先から出て行き、手足の感覚など既に無く、目も見開きながら見えていなかったが、だけどどこかで、梵天の四面のうち一つの顔が、片目をぎょろりと剥き、こちらを睨むのが見えた。

しかしそれも一瞬だった。

そしてブラフマンの一瞥を思いぶるりと震えた時、パーンドゥパクシニは指先の感覚が僅かなりとも戻っていることに気づく。

足の小指が身じろぎする。足の裏には床の木肌を感じた。熱い足には妙にひんやりと感じられる。

得体の知れぬ何かは今も身体に溢れていたが、もはやパーンドゥパクシニを呑みこむ怪物ではなかった。

その実感を、パーンドゥパクシニは奇妙な高揚感として得た。

それは確信とも言えた。

自分が、何か巨大な力を得たという確信である。

常ならば慄いてひたすら避けるしかない猛獣の、手綱を偶然にも握り締めたような興奮だ。

己を取り戻したパーンドゥパクシニは、ここに来てようやく、今も唇で繋がる相手の顔を見た。とはいえ、ここまではほんの数秒、いやそれ程の時間も経っていないのかもしれない。

ヒラニャカーラーは目を閉じ、眉をぎゅうぎゅうに寄せていたが、パーンドゥパクシニが目遣った時には既に緩み出してきていて、ひどい苦痛が和らいだ安心感のようなものが見ているこちらにも伝わってきた――それは、力の抜けた長い吐息が直接与えられたことでも知れた。

と、ヒラニャカーラーがはっと目を真ん丸に見開き、パーンドゥパクシニの後頭部と腕は一挙に開放されたが、同時に、逃げるように後ずさった相手にドンと突き飛ばされた。

しかしパーンドゥパクシニは倒れず、揺らぎもしなかった。

パーンドゥパクシニ自身それは意外で、何が起こったのか、すぐには把握ができなかった。跳ね返される形で壁に背からぶつかったヒラニャカーラーをまじまじと見てしまう。

ヒラニャカーラーは呆然の態でこちらを見ている。

その顔にはもう先ほどの苦しみの色は認められない。ただ呆けている。

黒い娘は光に照らされ、こちらを見る瞳までが混じり気のない闇の色であることがよく分かった。

そしてパードゥパクシニは、光源が己であることに気づく。

ヒラニャカーラーは、発光しているパードゥパクシニこそを見つめていたのだった。

今度は己の手に視線を移す。爪の先から、今も光は天に向けて立ち昇っている。

その光――熱を、留めようとしてみた。

たちまちからは停滞し、光は増した。

ぞくりと震えたのが、恐怖のためであったのか、歓喜のためであったのかは分からない。

発作的に、近場の壁に手を衝いた。

漆喰の壁はじゅうと音を立てて土の焼ける臭いを散らした。

すぐに手を離し、ちからを留めるのも止める。

パードゥパクシニはどこか薄ぼんやりと、しかし一方では誤魔化しようのない興奮を以って、立ち尽くした。

やがて光は消えた。

それでもなぜか冴えた目で、パードゥパクシニはヒラニャカーラーの、怯えと混乱の表情をしかと捉えた。

初めて見る、娘らしい表情だった。

この時初めて、二人は互いをまともに、一個の人間として、認識したのかもしれない。



昔々、<sup>ヒラニヤ</sup>黄金という怪物がいました。ブラフマンが戯れにより<sup>アームラ</sup>マンゴーの枝から生み出した雄鹿で、力強い体躯はぬばたまに光る黒、巖のような角は黄金で、天を突かんばかりの立派なものでした。

この美しい獣を神々の誰もが慈しみ可愛がりましたが、それゆえに獣は慢心し、周りを困らせるいたづらを仕掛けては楽しむようになりました。

たとえば、ある時はサラスヴァティーの腕輪を角に引っかけて駆け回り、果ては千尋のの谷にうっかりを装い投げ捨てました。またある時は、眠っていたガネーシャの長い鼻を角を使って器用に結び、先に<sup>ユーティカー</sup>茉莉花の花を載せてくしゃみをさせて起こしました。

しかし神々はこれを赤子の無邪気ないたづらだとして、叱りつけずに笑って許してやりました。

これに獣はますます気をよくして、もっともっと、あっと驚くようないたづらを仕掛けたいと思うようになりました。

そこで獣はブラフマンにお願いをしました。

「世の父なるブラフマン、私はもっともっと、この世のために役に立ちとうございます。しかし所詮はしがない獣の身、どれほどのことができますよう。どうぞ、父なる御身の恩寵で、わたくしに<sup>へんげしょう</sup>変化生の力を賜いませ。さすればわたくしも人の手や鳥の翼を以て、世の役に立つことができますよう」

理に適っているように思われましたので、最高神はこれを叶えてやりました。

これによりヒラニヤはただの獣ではなく、怪獣ヒラニヤになりました。

有頂天になったヒラニヤは、その身をあらゆるものに変えて楽しみ、神々をたいそう混乱させ、困らせました。

神々の内ではこの怪獣を問題視してブラフマンに抗議する者もありましたが、それでも多くの神は、まだまだ可愛い獣のすることだからと許していました。

さて、神々の花園には四季折々の花が全て咲き乱れていて、あらゆる者の憩いの場となっていました。

ここに入りを許された<sup>ハンサ</sup>白鳥のつがいがありました。<sup>インドラ</sup>帝釈天の覚えめでたく、夫の<sup>おんどり</sup>雄鳥は、かつてさる英雄を助けた功績により、神通力を授けられておりました。

ある時<sup>めんどり</sup>雌鳥は言いました。

「夫なるお方、この花園の中から、冬の花だけをより分けることがおできになりますか」

「もちろんできるとも、いとしき妻よ」

こうして雄鳥は、雌鳥を置いて花園じゅうを飛び回りに行きました。

一人で待つ雌鳥を、ヒラニヤが目にし、思いました。

「なんと美しく、丸々とよく肥えたハンサ鳥だろう。食したらどんなに美味だろうか」

思いつきを留めることができず、ヒラニヤは巨大な猫の姿に変じるとこの雌鳥をぺろりと食べてしまいました。

思った以上の味に舌を打ち、前足を舐めていると、花を集めていた夫のハンサ鳥が帰ってきました。

この雄鳥は何しろ神通力を授けられておりましたから、何が起こったのかを一目で察しました。

怒りに任せ、ヒラニャに突っ込んでいきました。

一方ヒラニャは、

「しめしめ、もう一羽来たぞ。どのように食ってやろう」

と、猫の姿のまま算段しておりましたが、恐ろしい勢いで飛び込んでくるハンサ鳥に恐れをなし、寸でのところで跳び退きました。

それでも向かってくる雄鳥に対し、元の姿に戻って鋭い角で迎え打とうとしましたが、すると雄鳥は虎に変わりました。

神通力を得ていましたから、変化生の力も当然、備えていたのです。

ヒラニャは慌てて鳥に変じて逃げ出します。ハンサ鳥も元の姿に戻りそれを追います。

こうして追いかけてこを繰り返した後、ヒラニャはあることを思いつきました。

「散りぢりに分かれてしまえば、きっと追って来られまい」

そうして自身の身体を八十八に分けてまた逃げ出しました。この時からヒラニャは怪物になりました。

しかしハンサ鳥もまた、自身を八十八に分けてこれを追いました。

さて、そのうちの一对がこの国に辿り着き、まだたちごっこを繰り返していました。

お互いに息も絶え絶えになってきた時、ヒラニャは捕まりかけましたが、小鳥になって逃れ、しかしハンサ鳥は鷹になって捕まえました。握りつぶされる前に虎に変わりましたが、今度はハンサ鳥は蛇になって噛みついてきます。怪物は更にマングースに変わりましたが、あえなく大蛇となったハンサ鳥に一呑みにされてしまいました。

さて、この後ハンサ鳥は人の姿になり、神通力を以てこの国を悩ましていた悪党を滅ぼします。そこを王にただ一人残されていた姫に見初められ、王と民とに望まれて、ハンサ鳥は姫の夫そして王となり、よく国を治めました。

さて、ヒラニャカーラーはこの王朝に生まれた。

母が懐妊した時には予言がされたという。

産まれる子は祖の力を受け継ぐだろう。

王宮は活気に沸いた。

しかし産まれた子は暗黒を思わせる肌をしていた。

通説として、高貴な血筋であればあるほど肌色は明るい。例外もままあり、通説はあくまで通説だが、それこそ例外的なまでの黒さであり、赤子を目にした誰もが不吉を感じた。

そのうえ、赤子は娘であった。

いかに力に恵まれていたとしても、女に王宮を継ぐことはできない。

ヒラニャカーラー

黄金の黒とは、その肌色を示すと共にいにしえに伝わる怪物をも想起させる、大変に皮肉な名であった。

期待が大きかっただけに落胆も大きく、ヒラニャカーラーの存在はほぼ黙殺されていた。

王女として不自由なく育てられはしたが、ヒラニャカーラーには母の記憶が全く無い。失意の妃は、呪われているとしか思えない子どもを目にしたくなどないと望み、周囲はそれを叶えたのだった。

とはいえ少数の侍女に世話されながら、ヒラニャカーラーは概ね平和に育った。

長じるにつれ周囲の視線に気づかないではなかったが、あまり気にならなかった。

ヒラニャカーラーは、そもそもあまり人間というものに関心が無かった。興味を惹いたのは、季節を経て変わる草の微妙な色合いや、空の色に雲の形、空気の匂い、雨の匂い、花の匂い、色、形。土の感触。勉強は嫌いで、文字は中々読めるようにならなかった。口承が最も重んじられる国柄であっても、それは一層の蔑みの種となったが、本人は至って気にしていなかった。むしろ、文字をあまり見ていると気が狂いそうになることもあったから、早く諦めてくれればよいのにとばかり、思っていた。

よく庭を歩いては、この庭に、鳥だけでなく、もっと多くの生き物がやって来ればよいのにと、そんなことばかり、ぼんやりと考えた。

実のところ、いつ予言された力の片鱗を見せるかと密かに注目されていたのだが、そんな気配はいっこうに表れないまま、ヒラニャカーラーは十四の歳を迎えた。

少し遅めの初潮が来た。

運命の日となった。

ヒラニャカーラーはひどい熱に苦しんだ。身体の奥から気持ちの悪い熱いものが出てきてあちこちを締め付けているようで、月経とはなんて嫌なものなのかと思った。

意識は朦朧とし、それでも眠ることができない日が何日も続いた。

その時ヒラニャカーラーは、己の内から湧き出てくる何物かの流れの向かう先、意志のようなものを感じながら、それが何であるのかを計れずにいた。だけど、もしもそれが分かったら、少しは楽になるに違いないとも感じていた。しかし熟考するほどの余裕も、まともな思考回路もろ

くに残っていなかった。全てが熱に、内側から浸食されて、世界の沖へと流されてしまったかと思えた。

だから実のところ、肝心の時の記憶を、ヒラニャカーラーは持っていない。

覚えているのは、一番傍で仕えていた侍女の、全身全霊でもがく力と、直後にすっと楽になった己の身体の、その時の感覚。

やっと楽になれたという、安堵ばかりだった。

次に起きた時、見慣れぬ岩の天井があった。

それから三年を過ごすことになる、王宮の外れの祠だった。眠っているうちに運ばれたものらしい。

扉は閉ざされていた。門は内側には無く見えないので、あるいは鍵は開いていたのかもしれないが、ヒラニャカーラーは動き出すという気持ちにもならず、外に出るという発想も得ず、ただ呆けた。

ぼうとしているうち、例の予言者が食事を持って現れた。

ヒラニャカーラーの産まれる前に現れて以来の登城だったので顔など知る由もなかったが、それでも正体が知れたのは、本人がそう名乗ったからだ。

この予言者は世に名だたる聖人であり、どの国のどの王宮であれ厚遇されるべき人物である。

その予言者が語ったところによると、ヒラニャカーラーは熱に浮かされて侍女に吸い付き、身の内で高まっていた神の力を注ぎ込んだため、侍女は衝撃に倒れた。

これを受け、王宮はヒラニャカーラーを、この祠で神に身を捧げ奉る巫女とすることを決めた、ということだった。

ヒラニャカーラーは、この話をただ受け入れた。相槌を打つ程度の感慨しか湧かなかった。

それよりは、どうやら初めての月経が終わり、気持ちの悪い熱も引いたらしいということが重要だった。

予言者はそれから二つのことを言って去った。

一つは、これからまたあのような熱を得た時は、すぐに祠の前の川に浸ること。大河の女神の支流であるから、神の力による熱を受け入れ、流してくれるものだという。

もう一つは、翌日からはその、力を受け倒れた侍女が身の回りの世話を続けることになること。

以上を告げて予言者は去った。

それから祠の外に出てみると、確かに川があった。しかし四方は高い石の壁に囲まれ、外界と繋がっているのは、外から閉ざされているであろう扉と、川だけであった。空すら四角く切り取られていることは悲しかった。

しかしその小さな空間であっても、木々は植わり、天を指していた。きっと鳥や、小さな生き物たちは訪れるだろう。太陽はまだ中天に届いておらず、鳥たちの声は朝の名残を味わい響いていた。

だからヒラニャカーラーは、対して憂いはしなかった。悲観など、思いつきもしなかったと言ってよい。

その晩は星空を見上げて眠った。

翌朝には侍女が来た。

顔を布で覆い、晒された両の目も伏せられていた。

やがてその目が上げられた時、その激しさと虚ろさにヒラニャカーラーは撃たれることになる。

覆いを外した侍女の顔は、醜く爛れ、あるいは変色していた。

……真っ黒な顔を青ざめさせ、震え、ひれ伏すように語るヒラニャカーラーを、パーンドゥパクシニは冷ややかに見つめた。

べたつく夜気は、無遠慮に二人を包む。

ヒラニャとハンサ鳥の神話は、パーンドゥパクシニにとっても馴染みのあるものだった。

その話は、実際、パーンドゥパクシニにとっても祖にあたる者の話である。

ヒラニャカーラーの国は、今でこそ隣国となっているが、数代前の王まではこの国と共に、一つの王朝を成していた。王朝の分裂により、二つの国は、王族はおろか村民に至るまで、今も互いに憎み合い、日頃から悪し様に罵り合う仲である。

だからまずはその意味で、パーンドゥパクシニは複雑な感情をヒラニャカーラーに対し、持った。ヒラニャカーラーは、あるいはここがかの隣国であるとは、気づいていないのかもしれない。その観点からは、全く屈託を感じさせない態度といえた。

やはりヒラニャカーラーは、やんごとない生まれ……それも王族の出だった。だがその事実も、今更、パーンドゥパクシニに感銘をもたらすものではなかった。

冷静になってみると、ヒラニャカーラーにされたことは、当初感じた通り、屈辱以外の何物でもない。

男ならば、女の望みに応えることは礼儀であるのかもしれないが、パーンドゥパクシニは神子である。いくら市井に暮らすとはいえ、本質的には俗世とは隔たった存在であり、そうあるべきである。少なくともパーンドゥパクシニはこれまでずっと、そのように努めてきた。

あれは、その全てを軽んじ、汚す行為だった。視線が冷ややかになるのは、如何ともしがたい。

だが、語り終えてうち震える黒い娘を見下ろしているうち、段々と、哀れみが勝ってきた。

先ほどまでの、どこか飄々とした無関心さが嘘のように、存在そのものが、罪悪の重みに揺らいでいるようだった。

この姫は、変わり果てた侍女の姿を見るまで、己が他人に対して持ちえる影響というものを、まるで意識せず、考えたこともなかったのだろう。ある日唐突にそれに気づかされ、その重みと、己が身の成しえた災難というものに、打ちのめされたに違いない。

そして今、同じ災厄を引き起こしかけたことに慄き、また、起こらなかったこと——パーンドゥパクシニの身が、明らかな異変を経験しながらも無事であることに、混乱して、我を失ってしまっている。

考えてみれば、哀れな娘だ。

身に覚えのない予言によって疎んじられ、ついにその予言が実現しても、身に過ぎた賜物でしかなかった。

結局は、全ては過去世の<sup>カルマ</sup>業に帰するので、自業自得といえればそれまでである。しかしそれは、パードゥパクシニの同情心や、憐れみの心を阻害するものではなく、またそうであってはならない。

パードゥパクシニは無言で、尚もヒラニャカーラーを見つめた。

先ほどから湧き上がってくる、この娘に手を差し伸べたいという気持ちに身を委ねてみようかと、傾いている。

もっとも、それが体のいい言い訳であることにも気づいていた。

下心が無かったなら、きっとパードゥパクシニは一も二もなく、この姫を助けている。己の身に災難が降りかかりうるからこそ、俗世や己のいやらしさに挑戦するように、手を差し伸べている。

力の感触が、身体中に、今だ強く残っていた。恐ろしいという感情があり、それ以上に、強烈に惹きつけられていた。

また、あれを体験したい……あの<sup>シャクティ</sup>ちからを、この手で扱ってみたい。好きなように。

この欲望のために、ヒラニャカーラーを是が非にも手元に置いておきたかった。

一方で、抗えないながらもその浅ましさに気づいているから、逆に匿うことを躊躇した。

どれぐらい、貼り付いたような時間が過ぎただろうか。ヒラニャカーラーが血の気のない顔を上げ、震える瞳だけを強く、パードゥパクシニに向けて、か細い声を吐いた。

「これから、汝の身体が、どのようになっていくか、<sup>わらわ</sup>妾には知るべくもないが……できることなら、何でもしよう。妾には、何ができるのか、何をすべきなのかすら、見当もつかぬ。だが、この身を捧げよう。このうえ何もせず、ただ去ることは許されぬ」

パードゥパクシニはしばし考えてから、応えた。

「何故私が、その侍女どのと同じ途を辿らずに無事であるのかには、心当たりがございます。恐らく、私が同じ祖の血を引いているからでしょう。しかしこれから先のことは、全く予測がつかませぬ。あなたが留まってくだされば、きっと心強いことでしょう」

翌朝、ヒラニャカーラーの熱は嘘のように引いていた。大事をとってもう一日寝てもらったが、体調としてはすっかり治ったようで、さすがに退屈そうにごろごろしていた。それでも顔色が良いというほどには言えないのは、心痛のためだろうか。

朝餉のために、薬草や香辛料を石臼ですりつぶしていると、ふと指先が気になって、手を止めて見つめてみた。

五指に何か漲っている感触がある。香辛料の匂いと色をうっすらと纏った、すらりと伸びた指は、ふるえる一步手前の、張りつめている暖かい感覚を得ていた。

顔の前にかざし、念じてみた。

爪の先からゆらりと、薄く炎が生まれて、消えた。

驚きはしなかったが、背筋が、ぞくりと、震えた。

ほんの少しの恐ろしさと――それ以上に、喜び。快感だった。

パンドゥパクシニがまず取り掛かったのは、ヒラニャカーラーの服の調達だった。

着るものがなくては、外にも出られない。元々、流れ着いた時に着ていた服は所々穴が開いていたり、引っ張られて薄くなってしまったりしているので、それで外に出したくはなかった。家の中や、人目の無い時間の間に合わせになら、というところが精々だ。

パンドゥパクシニの服を貸すという手も勿論あったが、パンドゥパクシニの潔癖症の気を差し置いても、ヒラニャカーラーが着るには派手過ぎる、悪目立ちしてしまう物しか無い。

パンドゥパクシニは、ヒラニャカーラーが着るには白のサリーが良いだろうと思った。木皮の衣でも良いが、仮にも王族の姫が身につけるにはいかにもみずぼらしい。白いサリーを着るのは寡婦がほとんどだが、出家した女性も着るし、白に色模様をあしらったものを着る娘もこの頃は多いから、一番無難な選択肢といえた。巡礼者が寺院を訪れることも、そう珍しくはない。無難というのは、ヒラニャカーラー個人の印象ということもあるし、神子が保護する相手として、それなりに理に適ったふうを装うためでもある。

寺院で行商から白い布を買い取ると、あとは本人に作らせようと思っていたのだが、当然のことながら、かしくかれて育った女に、衣の仕立て方など分かるべくもない。雑事の合間を縫い、二日で一着は仕上げたものの、とんだ厄介者を拾ってしまった、と、今更ながらに実感せざるを得なかった。

というのも、この娘は本当に何も知らなかった。調理の仕方も、どんな料理にどんな材料が必要なのかも。せめて火の起こし方ぐらいは知っているはずだと思っても、それも知らなかった。祠の生活では、夜は暗くなるに任せていたらしい。かろうじて服の着方だけは分かっていたが。

普通ならパンドゥパクシニが、進んでこの姫に奉仕すべしとなるのだろうが……あいにくパンドゥパクシニには、かしくくつもりは毛頭無かった。留まると自ら言い出したからには、た

だの厄介者に甘んじてもらうつもりは無い。例の力のことを差し引いてもだ。その信条ははっきりしていた。

とはいえ、そうであっても、料理のために刃物を持たせる際は相当に肝を冷やしたし、火の扱いについてもそれは同じで、実際ヒラニャカーラーは火傷をいくつも、腕にこしらえた。

師ラクシュミーの許に来る者は、誰でも、一通りの家事を仕込まれ、そこにいる間は分担して家を保った。赤子の時からいるパンドウパクシニについてもそれは同様で、物心ついた頃には台所の手伝いをしていたし、もう少し大きくなると大抵のことは大人に引けをとらずこなした。その分、一からそれらを仕込まれる姉妹たちを見てきたのだったが、それでも、最低限は家で仕込まれるか、あるいは見てきたりするもので――ここに来るような者は、女の仕事に興味を持ち、観察してきた者ばかりであるからかもしれないが――不器用でも不慣れでも、もう少し、どうにかなるものだ。

ヒラニャカーラーは、本当に、こうしたことと縁遠い生活を送ってきたらしかった。身分を思えば当たり前なのかもしれないが、半陰陽の自分が、普通は女のすることをこれだけできるのだと考えると、どこか滑稽だ。

尤も、本人は大した苛立ちも覚えることなく、それなりに楽しんでさえいる様子で、癪に障るところは大いにあった。

しかも、香辛料を使い分けるといった細やかな作業よりも、椰子の実を割り芋の皮を剥くといった、身体を使った作業の方が覚えが速いのである。舞は学ばされていたようで、型として教えると会得しやすいようだった。

それでも、妙なもので、ヒラニャカーラーが一人で椰子の実を割り、その汁を採り、中身を削り取ることができるようになると、不覚にも感動を覚えたのだった。

多くの人が、子どもを見ると無条件に世話を焼きたがるのを、今一理解できずにいたパンドウパクシニだったが、その気持ちの一端が分かったような気がした……それも、おかしな話ではあるが。

朝の沐浴と洗濯のために河に行く以外、できるだけヒラニャカーラーを庭より外に出さずにおいたが、それでも見る人はあるし、当然、師はよい顔をしなかった。

師には、ヒラニャカーラーの背景が、どうやら隣国の打ち捨てられた姫のようであり、行く宛も無いようだから、当面、預からざるを得ないと説明してあった。

師には、ちからのことは言わなかった。

言えるはずもない。

この力に触れたということ自体に、背徳感があった。

知られてはならない。

邪魔はされたくない。

しかし、追究の声は、師ではなく、他から上がった。

バララクシュミーである。



……バララクシュミーが初めて師の許を訪れた時、方々の態であり、思い悩んだ末に郷里を飛び出し、何日もの旅の果てに辿り着いたものだから、後に姉妹となる神子たちは、誰もが輝いて見えた。

その中でも、パードゥパクシニの輝きは殊に際立ったものだった。

造作の美しさもさることながら、何物にも侵されない、凜とした佇まいに打たれた。自分よりもいくつも歳下であるはずなのに、顔立ちに残る幼さがむしろ一層、神秘を掻き立てた。

バララクシュミーは、割と裕福な農家の長男に生まれた。

小さな頃はよくかわいがられ、何の疑問も抱かなかった。この世は幸福に満ちていた。

ある歳までは、男も女も無く育てられた。けれども徐々に、それまでは褒められた柔の性質が、厳しく咎められるようになった。

女たちにかわいがられるのは好きで、特に金の装飾品や色鮮やかなサリーには強い興味を持った。ほんの幼子がそれらを引っ張るのはもてはやされても、長じて尚惹かれ続ければ奇異に映る。

バララクシュミーは、（その頃には別の名前だったが）父に格別に厳しくしつけられた。

本人にとって最も不幸だったのは、中身にそぐうーと思わしきようなー軟弱な身体には生まれつかなかったことだ。望みに反して体格は大きくなり、畑仕事や父による武闘訓練で、自然と筋肉は隆々となった。

理性では、父は父として当然のことをしたのだと理解している。しかし今でもバララクシュミーは父を、苦味を以ってしか思い出せない。自分ばかりがおかしいのだと思っていた頃も、理解しようともしてくれない父への反発と憎しみは止めようが無かった。母や祖母、家の他の者たちも、同情的ではあったが、父の仕打ちも仕方なしと受け止めていた。

村の同輩とも、心の底からは打ち解けられない。彼らの話すことと云ったら、バララクシュミーにはとても興味が持てないことばかりで、それに適当に合わせつつも、同調しきれないことは簡単に伝わって、距離を置かれたものだった。

バララクシュミーは孤独だった。

さざめき笑う娘たちに混ざりたいと、どれほど願ったか知れなかったが、所詮は叶わない。

幼い弟妹たちの相手をしている時間だけが、心の拠り所だった。

女神の存在を知ったのは、一家揃って巡礼に出かけた時のことだ。

バララクシュミーの村の辺りでは、半陰陽の神子たちはいなかった。

立ち寄った先の寺院で見かけた、男とも女ともつかぬ奇妙な者たちに、しかしバララクシュミーの目は釘付けになった。

色鮮やかな衣を身に纏い、目許には アンジャリ 黒 を差している。だからこそ、尖った頬骨やどことなくゴツゴツとした体つきが際立っていた。

やはりいぶかしく思った家族が、土地の者に尋ねたので、彼らの正体は知れた。

女神の子と呼ばれる彼らは、男でも女でもない。時折そのように産まれる子どもは、女神の子

の許に預けられる慣わしとなっている。俗世に囚われない神聖な存在として、祝福を受け、あるいは吉祥を撒く。

その集団の中、楽の音に乗り、中心になって舞う子どもは、その話を体現する美しさだった。男でも女でもない、卑しい艶の寄り付く隙も無い、彫像のような美。

他の神子たちは、それに比べるとやや滑稽の感が否めなかったが、その、不器量と言って差し支えない危うい均衡の中に、バララクシュミーは己に通じるもの、親近感を見出した。

その後の巡礼の道中、彼らの存在は頭から離れなかった。女神の子を見かけたのが、その一箇所きりではなかったということもある。半陰陽というものは、案外とありふれたものであるらしかった。

そのうちに、自分は本来、半陰陽に生まれつくはずだったのではないかと、思うようになった。あるいは、元々そのように生まれついたのを、家族が怪しがり、呪術を以って男に変えてしまったのではないか。

考えれば考えるほど、そうに違いないと思えてきた。

バララクシュミーは常々、男というものは何と汚く、愚かで、くだらない生き物であるのかと思ってきた。父が、男であるべしとすればするほど、その感情は強まるばかりで、そんなものに生まれついた自分は何と不幸なのかと嘆いてきた。世間が、女を不浄、男を浄の存在と見ていようが、関係が無い。

巡礼も半ばを過ぎ、故郷の方向に進むと、バララクシュミーはありとあらゆる理由をこじつけて、初めて女神の子を見た寺院に再び寄るよう主張した。

他の場所でも良かったのかもしれないが、あの美しく舞いを踊る子どもが印象に残っていた。初めて見たということがあっても、心に残り、惹かれるものがあったのだ。

いぶかしがる家族を、それでも何とか引き連れてその寺院に戻ると、家族にはさっさと宿と見物に行かせ、自分は女神の子たちの許に赴き、一座の中で最も年長と思われる老神子に声をかけた。

ラクシュミーは、バララクシュミーの様子に何か思う所があったのだろう。周囲の女たちには「この男は、今本当に助けが必要だから」と翌日また来るように言い、その場を他の神子に任せると、バララクシュミーを連れて姉妹たちの家へ戻った。

姉妹たちはまだ寺院だから、家は人が出払っていて誰もいない。それでも何となく、そこが神子たちの共同生活の場であることは知れた。

ラクシュミーは、既に何もかもを見通しているように思われたが、そうであっても、いざ心を告げるのには尋常でない勇気が要った。

体を間違えて産まれてきた気がすると、意を決して口にしたら、ラクシュミーが眼差しで示した理解に、どれだけ力が抜けたか知れない。

一家で巡礼を終えて帰ると、バララクシュミーは弟妹たちとの別れだけを惜しみ、二日後には出奔した。帰って来たばかりのこの時に家を出る方が、まだしも一番迷惑をかけないだろうと思った。心の中だけで別れを告げた。

未練は無いと思い切ったつもりだったが、それでも身を隠すように野の道を進んでいると、と

めどなく涙が流れた。

もう二度と会うことは無いのだ。

生まれ変わりの儀式を経て、バララクシュミーはバララクシュミーになった。師のラクシュミーから名を頂けたことは、今も誇りだ。バララクシュミーはバララクシュミーになって初めて、本当に生きることができるようになった。日の光も花の色も、まるで違って見えるのだ。この世はこれほどに鮮やかだった。

共にはしゃいだり、心ゆくまで語ることもできる友も、姉妹たちに初めて見つけることができた。やはりこれこそが、あるべき姿だったのだ。

初めにバララクシュミーの心を捉えた若き舞い手は、他の姉妹たちのように心安くバララクシュミーを寄せ付けはしなかった。パーンドウパクシニという名のその子どもは、その歳としては不思議な穏やかさと冷たい鋭さを持っていた。

打ち解けることができないのは残念だったが、間近にこの存在を得られることは、この寺院の女神の子である、密かな特権であると思えた。

バララクシュミーが積極的にパーンドウパクシニに関わっていくようになったのは、ある年を境に、この若者がそれまでにない揺らぎを見せるようになってからだ。その頃に成人したパーンドウパクシニは姉妹の家を出てしまったので、普段の生活をつぶさに見ることはできなくなってしまった。それでも、かつてあった浮世離れした静謐さは失われ、どこか綱渡りをするような危うさが垣間見えた。時折、ふいに感情の猛りを見せたり、焦点の合わぬ目をするようになったのだ。

バララクシュミーには、元々弟妹たちの面倒だけは進んで見ていたぐらいだから、お節介の気がある。

それで、ちょっかいを出すようになった……パーンドウパクシニが、あからさまに眉を顰めるのや、無視を決め込んだりするのが案外と新鮮で、面白くなったのもある。

けれども、やはり歯痒い。

この関係をそれなりに楽しみ、この女神の申し子もまた歳相応の若者であったのだと、思い知りながらも、あの輝きをまた見たいと、願って止まないのだ。

パーンドウパクシニが異邦人を拾い、匿うようになったことは、たぶん姉妹の誰も喜ばなかった。

パーンドウパクシニはその人のことを、けして自ら語ろうとはしなかった。師であるラクシュミーとは何らかの話をしたようだったが、ラクシュミーも又、多くは語らなかった。

当初は、どうも高貴の出であるらしいその人の存在に、色めきたって想像を膨らませる向きもあった。だがいつまでも去る気配を見せないとなると話は別で、またパーンドウパクシニが全く釈明も説明もする気を見せなかったから、皆眉を顰めるばかりになった。

一度だけ、こっそりと見に行ったことがある。

何気なく外に出たりなどはしないようで、いくら待っても姿を見せるのはパーンドウパクシニばかりだったのだが、日が傾き始めた頃に、ようやく連れ立って外に出て来た。

白いサリーを纏い、パーンドウパクシニに先導されて出て来たその人は、まだ若い娘で、どこ

か幼い顔つきで、斜陽に目を細めた。

しかし何よりも、不吉なほどに黒かった。その肌も、緩く纏められた長い髪も、全てが。

二人が河の方角へ向かうのを見つめながら、バララクシュミーは師の心痛を思った。心を、痛めない筈が無い。連れ立って歩く二人の姿はそれだけで、人の心をざわつかせる、そういう妙な不吉があった。人の口にも上ろうというものだ。

不安と同時に、パーンドゥパクシニの不義理に対する怒りも湧いてきた。

恩ある師や、浅からぬ縁のあるはずの姉妹たちに、特に釈明もなく不安を与えるというのは不義理に他ならない。

大体、まるで自分一人で事を捌こうとしていること自体、姉妹たちへの立派な裏切りではないのか。

一晩すると、これは何か言ってやらねばならぬという決意に変わった。

バララクシュミーはお節介である。それは、女神の子になって堂々と心をはせるようになって初めて気がついたことだったが、自分では割と気に入っている性質である。誰かが気にかけて、声を上げなければならないことというのは、絶対にある。バララクシュミーになる前は、自らそうすることは憚られたが、今はできる。

仮にパーンドゥパクシニが真に女神に申し子であって、その選択には隠された大いなる意味があるのだとしても、怯むつもりは毛頭無かった。

バララクシュミーは、正しいと感じることをする。神であっても、ただ理不尽に人を振り回すのであれば抗議する心積もりがあるし、何よりパーンドゥパクシニには、人として果たす義理があるはずなのだ。

パンドゥパクシニの母は、さる<sup>クシャトリヤ</sup>戦士の家の娘であった。けして大きな家柄ではなかったが、娘の面立ちは満月の無垢さ、腰元はほっそりとくびれ、切れ長の目には蓮の瞳が咲いていると評判が立ち、王の第三妃として召された。

心根優しく美しい三妃は、たちまちに王の愛を独り占めにし、他の妃の嫉妬を買った。吟遊詩人たちはこぞって、一妃と二妃による嫌がらせをかいぐり、恋を成就させる二人の物語を歌にした。

ラクシュミーは、この三妃つきの神子として三妃の生家に求められ、共に王宮に上がった。元々、ラクシュミーがいた一座は大寺院に拠を置き、良家に召抱えられることも多い、いわば女神の子の名門であった。だから三妃の付き人になったこと自体は、全く不自然なことではなかった。

この三妃は、どういう訳か他の侍女たちよりも、女神の子であるラクシュミーに殊の外信を置いた。元々相談役として召し上げられたことも確かだったが、それほどに心寄せられるとは思っていなかったので、俄然張り切って嫌がらせへの対処や王との橋渡しに当たった。

王には、それまで娘しか子が無かった。

三妃は、王の長男を産んだ。

それからは、一妃や二妃個人というよりも、その家からの悪意を受けた。

最善を尽くしたつもりだったが、護ること叶わず、三妃は、恐らくは毒による病で、儂くなった。

この時、三妃がラクシュミーに遺した言葉が、ラクシュミーと、そしてパンドゥパクシニの運命を決定した。

この子までも殺されてしまう前に、どうか密かに連れ出して、女神の子として長らえさせておくれ。

言葉を受け、ラクシュミーは悩んだ。三妃の願いは、この状況にある母としては突飛なものというより、真っ当なものとも思えた。

三妃もその子も、常に命の危険に曝されていた。

しかし三妃の言葉に従うことは、王に対する裏切りとなる。

何より、この赤子は、あるいは額に示されていれば、数々の試練をかいぐり、やがては王になる器を持っているやもしれぬ。

しかし女神の子としてしまえば、それは永遠に叶わない。男でなくては、王になれない。

虫の息で眠る三妃の傍ら、ラクシュミーは女神に祈った。三妃の命数を延ばすよりも、赤子の未来のために祈り、ラクシュミーに道を示してくれるよう願った。それが三妃の望みにも沿うと思った。

すると、女神が現れ、何も言わずに微笑んだ。

神子とはいえ、女神その人に見えたことは無かったから、しばし呆気にとられ、夢かと思ったラクシュミーだった。

しかし女神が切れ長の目を慈悲深く三妃に向け、頷いたのを見るや、ハッとした。

女神が応えたのは、ラクシュミーにではなく、三妃の祈りに対してであったに違いない。

女神が立ち消えると、ラクシュミーは三妃に駆け寄った。

安らかに、満足げに微笑んでいたが、事切れていた。

ラクシュミーが上げた嗚咽の聲に、控えていた侍女が気づき、やがて人が集まり、王も呼ばれた。

王もまた、号泣した。

その姿に心を痛めながらも、紛糾の隙を突き、王子を連れて王宮を逃れた。

追っ手から逃れるため、五年ほど森に隠れた。

誰も巻き込めないから、生まれ変わりの儀式はラクシュミーが一人で施した。辛かったが、これこそ運命であると思いついていたから、齒を食い縛って涙を堪えた。赤子を哀れに思う心も打ち消した。

赤子は当然、手がかかったし、赤子の面倒を見た経験などほとんど無かったとは言え、特別に気難しい赤子であるように思われた。あまりにも思うようにいかず、赤子がどうした訳か泣き続ける時などは、ラクシュミーの方が参って泣いてしまったこともある。

それでも、成長する様はかわいく、また舞や歌を教えると、瞬く間に上達したので、どんどん教え込んだ。

五年が過ぎる頃には、もうほとぼりも冷めているだろうと森を出た。良くも悪くも、王宮では物事の変遷は速い。

くにざかい 国境 近くの町に手ごろな寺を見つけたので拠点と定め、周辺の寺院の女神の家から若い神子を二人預かり受けて、女神の子としての活動を再開した。

幼い女神の子がいるのは、そうおかしなことではないから、元王子の幼子も前に出し、舞わせた。すぐに評判になり、田舎町で食べていくには充分すぎるほどの喜捨が得られるようになった。

仮に王宮の耳に入ったとしても、幼い神子が評判を呼ぶのはそう珍しいことではないし、どうせ半陰陽に王の位を継がせることはできない。少なくとも一妃や二妃の勢力に狙われることは無いだろう。

もともと、ラクシュミーというのはありふれた名前だから、敢えて変えずにおいたが、王子の名はラクシュミーの胸にだけしまっておき、生まれ変わりの儀式と共に赤子には女神の子としての名が授けてあった。

パンドウパクシニの王子としての名は、成人の時、出生の真実を伝えた時に密かに教えた。その時には、ラクシュミーの許の女神の姉妹も七人に増えていた。

パンドウパクシニはその時まで、生まれ変わりの儀式というものに否定的だった。どうして「生まれ変わる」などという不自然なことをしなくてはいけないのか。天によって生を享けた通りに生き、宿業に従って死ぬということがどうしてできないのか。

そもそも、生まれ変わりの儀式というものは、三度ほど立ち会ったが、おぞましいものにしか思えなかった。男のものを見たことがなかったパーンドゥパクシニにはそれだけで衝撃だったし、儀式は、女神の加護の元とはいえどあまりに血生臭かった。数々の薬草と血の混じった、強烈な臭いは今以て鼻を突く。

その儀式を、己もまた幼い時に受けていたのだとは、とてもではないが受け入れ難かった。

男も女も、救い難い俗な生き物にしか見えなかった。己がそんな愚かな生き物だったのだと、思いたくはなかった。

師が遠い京の話をはじめた時には、何の冗談かと思ったし、夢物語としか思えなかった。王宮など、想像もつかない。ただの昔話りのようにしか思えず、現実感など欠片も無かった。そんなことよりも、自分が女神の子として産まれたのではなかったという、その事実こそが重く、衝撃だった。

それまで信じてきた世界が根元から揺らぎ、その前後数日のことはよく思い出せない。

だけでも、信じ難いことに、ふと気がついた頃には、王子として育てている自分を想像するようになっていたのだ。そんな己にまた衝撃を受けたのだ。いくら止めようとも、止めようが無いのだ。

想像に出てくるのは、黄金の兜や装飾品を身に纏い、知識と武術を身につけ、美しい白亜の宮殿と輝かんばかりの草原を栗毛の馬に乗って疾走し、人々に愛されて育つ自分だった。

かつては頭の端にも上らなかった、下界の富と豊かさを享受する自分を思い描いていた。

恐ろしい吸引力を持つ想像だった。妄想を止めることができないのだ。

ありえたかもしれない生を想像するのは苦しい。見下していたものに強烈に惹かれていく自分を認めるのは大変な苦痛だった。それも、今では絶対に実現しないと分かりきっているのだ。

師の元にも、姉妹たちの傍にもいたくなく、家を出た。

師は、産まれた時から女神の子であったのだという。まだ幼い時分に、女神の子たちが両親の下に迎えに来たというのだ。

その事実には、パーンドゥパクシニは謂れのない理不尽さを感じた。自分ばかりが紛い物であるのは、不公平だ。しかしそれが単なるやっかみの感情だとも分かっている、そのように制御できない感情と、自分自身とに吐き気がした。

夜、一人で瞑想をしながら、パーンドゥパクシニはいつも、女神に祈り、何事かを願った。

だが、何を願えばよいのかが分からない。

己が何を望んでいるのか、もはや判別がつかないのだ。魂の平安がほしかったが、思考し、思い悩むことをしなくなるのも恐ろしかった。

虫の声や鳥の音に身を浸し、万物に沈み溶けてしまいたかったが、目を開けばいつも己はそこにあった。人間の醜さと、孤独の業を背負った、救い難い己だった。

夜明け前に目を覚ますと、降り注ぐ鳥の声を感しながら、戸の前に灯りを灯す。毎朝のことだから、灯明の位置も、火の灯し方も身に染み付いている。

夜明け前の大気というものは、一日で一番澄んでいる。

暗闇の中、陰としか映らない木々の香りを吸い込み、しばし立つ。

それから家に戻ると、ヒラニャカーラーを叩き起こした。

ヒラニャカーラーは寝起きが悪い。初めこそ、病人だから、客人だからと遠慮をしていたが、どの道朝に河浴みをしないと熱を出すということもあり、今では躊躇なしに叩き起こす。

半眼のヒラニャカーラーは、しばらくまどろむ。

ほんの少しだけ猶予を与えると、パンドゥパクシニは手を引いて歩き出す。これも、待っていてはきりが無いと学んだのだ。

灯りを持ってヒラニャカーラーの手を引き、森の道を歩いていると、何となく不思議な気持ちになる。誰かこうして歩いていることが、いつまで経っても、不思議であり、同時にどこか懐かしいのだった。

幼い頃に住んでいた森を思い出すのかもしれない。

覚えていないほど昔に、こうして誰かと手を繋いで、木々の匂いの中を歩いた気がする。誰かと言っても、師でしかありえないのだが、はっきりとした記憶ではないし、何より、優しい以上に厳しかった師が自分の手を引いて歩いたというのは、中々想像だにし難かった。

河に着いた。

ここまで来ると、冴えない頭でもすべきことは身につけているようで、すぐに河に入る。その間、パンドゥパクシニは洗濯をする。

朝の水は冷たい。それに躊躇い無く身を浸しに行く姿に、いつも少なからず気後れする。

苦しがる時は、パンドゥパクシニの手に触れるだけでもそれなりに楽になるようだったが、やはり河に入っておくのが最も確実らしい。

初めは、手が触れるたびに血が波打つほどの、ちりちりとする雷のような何かが流れ込んできて、火傷をしているような気持ちになったものだった。しかし今ではすっかり衝撃は薄れた。

そうはいつても、流れ込んでくるものは今も感じるから、こちらの側で耐性が付いたということなのだろう。

洗濯は早々に終えてしまい、夜明けを待ちつつ、岸辺に腰を下ろす。

やがて光の珠が天に落ちるように日が姿を見せ始めると、腰まで河に身を浸したヒラニャカーラーの陰がうっすらと照らし出される。

それは、それなりに絵になる光景だった。

暁に祈る娘。

パンドゥパクシニは、この時間が嫌いではない。

しばしすると、割合すっきりとした顔で上がって来るので、今度は無言で歩き出す。手を引かずとも付いて来る。



家に戻って、いくらかの朝食の下ごしらえを頼むと、自身は寺院に仕事に向かった。

いつのまにか、日常に組み込まれてしまった習慣である。

ヒラニャカーラーのいる生活が当たり前になってしまった。慣れてしまえば、それなりに心地よいものであり、もうずっとこうして生活してきたような気さえしてくる。

どこかで、椰子の大きな葉の落ちる音がした。

もっとも、いつまでこの、奇妙ともいえる共同生活が続くのかは、何とも言えないところであり、天秤の上で揺れているような不安定さも感じている。

こうも先の見えないことは、これまでの生活ではありえなかった。

数日先のことさえ分からないという気持ちが、常にどこかに潜んでいる。

生活そのものもそうだし、自分自身の状況もそうだ。

今のところ、パーンドゥパクシニの身体に大きな異変は無いが、ヒラニャカーラーの<sup>シャクティ</sup>ちからを受け続けていけば、いつどのようなことが起きるか、分からない所がある。ヒラニャカーラーの侍女のように、顔がただれ、見る影も無くなってしまおう自分を想像すると身震いがする。ヒラニャカーラーも、それが怖いからか、朝のまだ呆けている時以外、パーンドゥパクシニに触れようとはしない。

それでも、力の実感を望んでしまうのは、パーンドゥパクシニの方である。

寺院に向かう道、金色の熱い光が、身体中の血に漲っているのを感じて歩くのは、気分がよい

。目に映る何もかもが、パーンドゥパクシニを脅かさない。ただ、在るがままに、美しくそこに在るだけだ。

寺院に着くと、例によって既にいるバララクシュミーに、硬い声で言われた。

「話があるから、今日の朝食は姉妹の家でとりなさい」

訝しんで訳を尋ねると、

「心当たりが無いとは言わせないわ」

と言う。

その通りではある。ヒラニャカーラーのことだろう。師以外の人間には、彼女のことを紹介したり説明したりはしていない。

面倒だ。

何も訊かれないと、思っていた訳ではないが、それでも見ぬふりをしていてくれないかと期待していた。

簡単に説明できる経緯でもないし、全てを語るつもりもない。どうせ、理解できるはずもないのだ。

だから、実際に朝の仕事が終わると、パーンドゥパクシニは一旦帰ると告げた。

「どうして。朝言ったじゃないの」

「朝餉の支度が無駄になる」

言い訳であることは明らかだろう。朝食を済ませた後も、今日はもう出て来るつもりは無かった。どのような説明をしても、核心のところを隠すつもりであるうちは……否、あるいは全て話すつもりであったとしても、納得させることはできない。ばかばかしいほどに億劫だった。

バララクシュミーは眉を吊り上げた。

「本気で言ってるの、パーンドゥパクシニ」

「本気も何も無いだろう」

「私たちは女神の姉妹でしょう。あなたが私たちなど眼中に無いことはよく分かっているつもりよ。でも、それでも私たちは姉妹だ。それにあなたは、師までも蔑ろにしている」

虚を衝かれた。

「……誰が、師を蔑ろにしている？」

かろうじて言葉にしたのは、聞き捨てならなかった箇所<sup>の</sup>反復である。

同時に、凶星を突かれたという思いもあった。

即座に否定したかった。

しかし、

「あなたのほかに誰がいるの。それとも、信頼して全てを預けることができないぐらいでは、そうとは言わない？」

と言われると、しばらく次の言葉が出て来なかった。

己の中に既にあった想いを、そのまま言葉にされた気がしたからだ。

パーンドゥパクシニはまじまじとバララクシュミーを見た。

藍と桃色のサリーを身に纏い、椰子油で撫でつけた長い髪を後ろに流し、お世辞にも美しいとは言えない骨ばった顔立ちに、肩肘の張った身体つき。

見飽きるほどに見知った相手である。

この姉妹を、パーンドゥパクシニは、よく知っている、と思ってきた。

しかし今、尖った鼻や落ち窪んだ強い目といった造形が、急に恐ろしいもののように浮かび上がってきて、パーンドゥパクシニは密かに身震いした。

眼中に無い、とはよく言ったものだ。

その通りだった。考えたことも無いほど、その通りだと思った。姉妹たちの存在はパーンドゥパクシニにとって、常に、煩わしいもの、目障りな存在でしかなかった。師に対するような、屈折した感情を持つ必要も無いほど、パーンドゥパクシニにとっては歯牙にもかからぬ存在であり、仮にいなくなってしまうとしても、パーンドゥパクシニの<sup>アートマ</sup>存在には何も影響を与えないだろう。

だからこそ、急に輪郭を以って浮かび上がってきたこの姉妹に、戸惑いを隠せなかった。それも、どうやら大層怒っていて、パーンドゥパクシニを揺るがすようなことを今にも口にしようなのである。

しかし、己の口を衝いて出て来たのは、自分でも思いもよらない反論だった。

「全て預けるといのは、生まれ変わりと称して自然を歪めることを言うのか」

バララクシュミーは目を見開いた。

「そんなふう<sup>に</sup>に思っていたの」

また、考えるより先に口が動いた。

「他にどのように捉えればよいのだ。私たちは赤子の誕生を祝うのに、自分たちは人としての在るがまま、生まれたままの姿を否定している。それをどうして、ただ受け入れろというのか」

「何があるがままかなんて、誰が決めるの」

バララクシュミーは顔を歪ませ、しかし強い熱を以って言った。

「生まれながらの神子のあなたには、信じられないかもしれない。だけど、人の運命なんて、神の気まぐれや人の呪いによって、いくらでも変わってしまうものだわ。それをどうして、どうしてただ受け入れろなんて言えるというの」

パーンドゥパクシニはハッとして言葉に詰まった。

パーンドゥパクシニは、生まれながらの神子ではない――まさに自分が言った通りの、不自然な存在である。

しかしそれを決定したのは、母であり、師であり、女神であった。

パーンドゥパクシニ自身、ずっと自然と信じてきた己の姿が、実は在るがままではなく、他者によって歪ませられたものであると知った、その経験があるのだ。

バララクシュミーの言葉は、鋭く正し過ぎて、パーンドゥパクシニの心の臓を射止めかねなかった。

ひどく動揺するのと同時に、どうにかしてこの相手を黙らせなければという、危険信号がけたたましく身体を駆け巡った。

肌という肌が粟立ち、総毛だった。

その時だ。

一陣の風が通り過ぎ、上空では黒い雷雲がもくもくと集まり出した。

閃光が瞬いた。

一つの大きな落下音が辺りを震わせ、丁度パーンドゥパクシニとバララクシュミーの立つ間から、少しだけ横にずれた所に、人一人が嵌まってしまえる大穴を穿った。

姉妹の一人が悲鳴を上げた。俄かに辺りがざわめき出す。

バララクシュミーは呆然と、あぐりと口を開けて立っている。

しかしパーンドゥパクシニは全く別の興奮と衝動の中にいた。

その感情の赴くままに見えない腕を振り下ろすと、今度はパーンドゥパクシニとバララクシュミーを挟んで反対側に、また別の大きな穴が開いた。

快感。

小さな震えが、足の指先から頭のとっぺんまでを駆け上った。

強風が一带を掻き回し、怒号が辺りを覆った。

その風も思いのままだった。

このまま、雷と風でバララクシュミーの命を握り潰してしまうことは、たぶんどできる。

ほんの僅かな間、強烈な破壊の誘惑に駆られた。

無視してしまうには大きすぎる魅惑だった。

それでも、ほんの爪の先ほどの差で、とみに湧いて来た恐怖心が勝った。

己を咎人にしてしまう、己の存在を汚してしまうという恐怖だった。

だからパンドゥパクシニは、何よりも己の負の可能性から逃げ出すために、きびすを返し、姉妹たちに背を向け走り出した。

目端に師が映る。強風に煽られ、尻餅をついていたが、はっきりとパンドゥパクシニを見ていた。

その視線も振り切って走った。

心なしか、速く走っている気がする。

風が後押ししていた。

それに気がつく、残りの道のりは一瞬だった。

風に運ばれるように家に入ると、うとうととまどろんでいたヒラニャカーラーはびくりと震えて起きた。

パンドゥパクシニは入るなり口を開いたのだったが、朝食の下ごしらえが目に入って来て、しばし言葉を呑み込んだ。

剥かれた野菜も、すり潰されて液状になった米も、打ち捨てるには静かで、清らかだった。

「ヒラニャカーラー。ここを出なければなりません」

ヒラニャカーラーは驚いたようだったが、何故とは言わなかった。

「どこに？」

どこへなりとも、と言おうとして、それは違うと気づく。

「女神の所へ」

すると、少し不思議そうな顔をしながらも

「あいわかった」

と答えた。

「朝餉は？」

「勿体無いですが、これは道中で牛にあげていきましょう」

いささか残念そうな顔をしたヒラニャカーラーだったが、すぐに立ち上がった。行かないのかとばかりに見てくる。

あまりにあっさりとしていて、パンドゥパクシニが戸惑ってしまうほどだったが、たしかに、ヒラニャカーラーは元々、何を持っているという訳でもないのだった。

「……代えの服、一着ぐらいは、持って行きましょう。他はどうとでもなりますが」

そうして二人は旅立った。